

# うま獣医のよもやま話 ⑨ 藤本 起彰 獣医師

## 日常の消毒について

藤本 起彰 三重県出身

平成22年 麻布大学卒業

同年 日高軽種馬農協門別診療所  
勤務

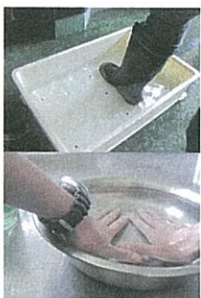


門別診療所勤務2年目の藤本起彰と申します。4月に入り、いよいよ出産、種付けのシーズンも本格化してきましたね。産まれた子馬はトラブルなく順調に成長していますか？子馬は産まれて2ヶ月頃までは母馬の初乳から摂取した免疫抗体により感染症から守られています。しかし生後2ヶ月頃になると母馬からもらった抗体が無くなりはじめで一時的に子馬の免疫力が低下している状態にあります。そのため生後2ヶ月前後にロドコッカス感染による肺炎や関節炎、ロタウイルス感染による下痢をはじめ、風邪をひいたり下痢をしたりと体調を崩す子馬が多発します。

このような感染症の蔓延を防ぐために、換気を良くしたり消毒槽を設置するなどの予防策をとられていることと思いますが、今回は一番身近でかつおそろそかにしがちな厩舎内での踏み込み槽による消毒についてお話したいと思います。

### 1 消毒の重要性

病気は「治療より予防」が重要です。細菌性の下痢やロタウイルス性下痢のように強い感染力を持ち感染子馬の糞便に病原体が排泄されるような感染症は、1頭発生すると同じ厩舎内の馬に次々と感染が拡大します。感染馬の糞便が靴に付着することで人が病原体の運び屋となってしまうことも少なくありません。牧場には牧場スタッフだけでなく、獣医師や装蹄師を含め外部からの人の出入りもあるため尚更です。こういった感染の拡大を最小限に抑えるためには右のように厩舎入り口や馬房前への踏み込み消毒槽の設置による靴の消毒や、感染馬に触れた直後の手洗いおよび手指消毒が重要です。しかしせっかくの消毒薬も、正しく使わなければ効果が薄れるどころか逆効果になることさえあります。少しでも感染症を拡げることを防ぐために、消毒薬の性質を知り正しい使い方を心がけ、全員で消毒を励行しましょう。



### 2 消毒薬の性質

ほとんどの消毒薬に共通する性質として1つめは効果の高い使用温度があるということです。消毒薬は20～25℃で最も高い効果を発揮します。踏み込み消毒槽に消毒液を作る

ときは原液を水で薄めて作るのではなく、ぬるま湯で薄めて作るのが好ましいです。また冬場は気温が低く消毒液が凍ってしまうこともあるので夏場よりこまめな交換を心がけましょう。

2つめの消毒薬の性質として、有機物（汚れ）に弱いことが挙げられます。消毒薬は有機物（汚れ）と化学反応することで消毒効果を失ってしまいます。踏み込み消毒槽を何日も交換せずに使用することは全く消毒の意味を成しません。消毒効果が無いだけならまだしも、効果を失った踏み込み消毒槽内では、余った有機物（汚れ）を栄養源として細菌がものすごいスピードで増殖していきます。このように悪い菌で汚染された消毒槽に靴を浸け厩舎内を動き回るということは、消毒に気を使っているつもりが、逆に悪い菌を人の手で拡げてしまっていることになります。



以上のことから、踏み込み消毒槽は必ず定期的（1日に少なくとも1～2回、冬場は2～3回を目安）に交換しましょう。

### 3 消毒薬の種類と使用濃度

踏み込み消毒槽に用いる主な消毒薬



「パコマ」や「クリアキル」は、踏み込み槽内にぬるま湯で500倍～2000倍に希釈して用います。

手指消毒に用いる主な消毒薬



調理用ボウルなどの容器に希釈液を作っておき、病馬に触れた直後に石鹸で手をしっかり洗い、手を浸します。「塩化ベンザルコニウム液」は100～200倍希釈、「マスキン液」は10～50倍に希釈して用います。その他、手洗い後に70%アルコールを手にはスプレーして擦り込むのも非常に効果的です。

冒頭にも述べましたように、「病気は治療より予防」が重要です。感染症の発生や拡がりを完全に食い止めることは不可能ですが、人の手によってむやみに感染を拡大させることは最小限に食い止めなければなりません。感染症が流行しはじめてからではなく常日頃から効果的な消毒を心がけることで、1頭でも多くの子馬が病気にかからず元気でいられるように、全員で消毒を励行しましょう。